

北方領土の日も過ぎたけれども、江戸末期の 19 世紀には、国際情勢が大きく変動し、ロシア船やイギリス船が日本近海にあらわれて、通商を求めている。幕府は鎖国政策の維持とともに国防上の観点からも重大な決心を求められつつあったといえる。

1792(寛政4)年にはロシア使節ラクスマン(ラクスマン)が、根室に来航して通商を求めた。また1804年には、レザノフ(レザノフ)が長崎に来航して通商を要求したが、幕府は鎖国の方針をたてにこれを拒絶し、退去させた。

このような事態に対し幕府は、蝦夷地(えぞち)やその周辺の防備の必要を感じて、1798(寛政10)年近藤重蔵らに千島を探検させ、蝦夷地を直轄地とし松前奉行に支配させ東北地方の諸藩に警備を命じた。(朔東から第51号を参照)

朔東に関係する北辺の探検者は、同時代人である、松浦武四郎、近藤重蔵、高田屋嘉兵衛、最上徳内である。彼等の功績等の概要を紹介しよう。(順番は生年順)

帯広着任以来機会なく訪れていないが、ノシャップ岬は、根室市観光協会のポスターで言うところの「冒険者たちの岬」であり、以下の四名もそうだろうし、或いは名もなき探検者達の希望の道標であったのではなかろうか。かの時代の日本人は、かくまでに冒険心に富み、探究心に富んでいたのである。平穏に流れ、安逸を貪っている現代の日本人に、フロンティア精神の復活が望まれる。

● 最上徳内(1755~1836)

江戸末期の北方探検家。出羽国村山郡楯岡村(現、山形県村山市)の貧しい農家の長男として出生。1781年(天明1)江戸に出て幕府の医師山田宗俊(凶南)の家僕となり、のち町学者として江戸でも有名であった本多利明の音羽塾に入って天文、測量を学んだ。1785年利明の推薦で幕府の蝦夷地調査一行の竿取となり、翌年にかけて国後(くなしり)島、択捉(えとろふ)島を調査し、ついでウルップ島に渡った。

1789年(寛政1)国後、目梨地方のアイヌの蜂起調査のため幕府の密偵青島俊蔵らと松前に渡ったが、青島が松前藩に助言を与えたかどにより処罰された際、不運にも連座して投獄された。のち疑いが晴れて普請役下役、普請役に取り立てられ、91年に南千島、92年に樺太(サハリン)を探検した。1798年幕臣近藤重蔵等と共に択捉島に渡り、択捉島に『大日本恵登呂府』という標識を立てた。1805(文化2)、06年目付遠山景晋(かげみち)の西蝦夷地調査を案内し、1807年には箱館奉行支配調役並となり、ロシア船来航に際し斜里、樺太に派遣されて諸藩兵の監察にあたった。

26年(文政9)シーボルトが江戸に来たとき、その求めに応じて自分の蝦夷地測量図を貸し、アイヌ語辞典編纂を援助した。シーボルトはその著《日本》にこれらのことを載せ、徳内の業績を「18世紀における最も傑出した日本の探検家」と讃えた。命がけの探検に挑む強い意志を有すると同時に温厚で実直な人柄からアイヌ民族と親交を結び、地理や気象を知るアイヌの協力も得ていたと言われる。著書に北国の様子や暮らし振りを描いた「蝦夷草紙」「蝦夷草紙後編」「度量衡説統」などがある。1836年、江戸で死去、時に82歳であった。墓は、文京区向丘連光寺にある。最上徳内記念館あり。

幕府普請役の時に、歌別からウタベツ川の溪谷を遡り、トヨニヌプリ(豊似岳)の

中腹を通り、猿留川の中流に出て海岸に至る所謂猿留山道を開削した。

● 高田屋嘉平衛(1769～1827)

明和6(1769)年、津名郡都志(現在の津名郡五色町都志)の漁師の家に生まれた。22歳の時、兵庫津へ出て樽廻船の船子となるが、めきめきと頭角をあらわし、2年後には船頭となった。兵庫津の名門、北風家を経て27歳の時に独立、出羽国で千五百石の辰悦丸を建造し、海運業に乗り出す。嘉平衛は兵庫津西出町の本店のほか、蝦夷松前に支店を置いた。

寛政11(1799)年には、択捉島への渡航に成功し、翌年には幕府の近藤重蔵の協力もあり、同等の漁業資源の開発に乗り出した。幕府によるロシア人ゴローニン捕縛の報復で、ロシア政府に拘束されたこともあったが、日本とロシアの関係改善に終生心を砕いた。享和元(1801)年には、択捉開発の功により名字帯刀を許され、嘉平衛は押しも押されぬ豪商となった。

文政元(1818)年、嘉平衛は引退し郷里の都志へ戻った。晩年も郷里の港の改修など社会事業への協力を惜しまなかったという。文政10(1827)年、都志の地で58歳の生涯を閉じた。生涯を知りたいければ、司馬遼太郎氏の『菜の花の沖』が適当だろう。

● 近藤重蔵(1771～1829)

近世後期の北方探検家。名は守重、通称は重蔵、号は正斎。1795-97年(寛政7-9)、長崎奉行出役として海外知識を深め、蝦夷地警衛の重要性を幕府に建言、98年目付渡辺久蔵らの蝦夷地視察の一行に加わり、翌99年蝦夷地御用掛が設けられると、その配下に属し、数回にわたり蝦夷地・千島方面を探検し、特に高田屋嘉兵衛の協力を得てエトロフ航路を開き、1802年(享和2)エトロフ島でロシアの標柱を廃し、「大日本恵登呂府」の木標を立てるなど、ロシアの南下に対する北辺の防備・開拓に尽力した。

08年(文化5)書物奉行となり、「辺要分界図考」「外蕃通書」「金銀図録」「好書故事」など広範な著書を著した。重蔵作『蝦夷地図』では樺太を島としながら、貼付紙片を合わせれば半島となり、『辺要分界図考』中の図では樺太とサハリンの地名を併記しており、南樺太と南千島こそ踏査されたものの、その北方は判然としない段階であった。逢坂剛著「重蔵始末」は、鬼平犯科帳で有名な、火盗改を勤めていた頃の活躍を描いている。

朔東から第52号で述べたところではあるが、近藤重蔵は、蝦夷地の道路開削を初めて行った者である。即ち、寛政10年(1798)支配勘定近藤重蔵が、東蝦夷地を巡視し、広尾まで帰着した。広尾から幌泉に至る間は海岸険難の所が多く、且つ偶々風雨に阻まれて滞留数日に及んだので、道路を開墾しようと思立ち、十勝ルベシベツからピクタヌンケに至る所謂「ルベシベツ山道」3里弱を開削した。三浦綾子の小説で著名な塩狩峠には、「近藤重蔵ゆかりの地記念碑」がある。

● 松浦武四郎(1818～1888)

江戸末期の北方探検家。伊勢国一志郡須川村(現、三重県一志郡三雲村)の郷士松浦桂介

(後に慶裕)の四男。幼名竹四郎，のち武四郎。諱(いみな)は弘(ひろむ)，字は子重。1833年(天保4)から日本国中を遊歴し，38年から5年間長崎，平戸で僧となり，名を文桂と改めたが，この間長崎の乙名(おとな)津川文作から北方の事情を聞いて関心を強め，44年(弘化1)帰郷して還俗したうえで単身北行した。

翌45年東西蝦夷地，46年北蝦夷地(樺太)，49年(嘉永2)国後島，択捉島を探查し，「初航蝦夷日誌」「再航蝦夷日誌」「三航蝦夷日誌」などを著した。54年(安政1)江戸幕府が箱館奉行を置いて翌55年蝦夷地を再直轄すると，幕府御雇として蝦夷地御用掛に起用され，56年から58年まで東西蝦夷地，北蝦夷地を探查して「《竹四郎廻浦日記》」「東西蝦夷山川取調日誌」「東西蝦夷山川取調図」などを著した。場所請負人のアイヌに対する過酷な扱いを詳細に記した日誌については公にすることを許されなかったこともあって，59年江戸に帰って御雇を辞し，以後市井において蝦夷地紹介を目的とする多くの著書を刊行した。

68年(明治1)東京府付属，69年開拓判官に任用され，彼は「蝦夷地道名国名郡名之儀申上候書付」によって北海道の道名，国名，郡名を選定し，「北海道の名付け親」と言われるようになった。たが，新政府のアイヌ政策に同調できず，翌年辞任し，以後清貧に甘んじ著述をもって余生を過ごした。明治22年(1888年)に没す。

(参考：百科事典、各種HP)